

ひろば大代

NO. 209

大代公民館

「文化祭を終えて」

大代婦人会長 田辺幸子



「かくれた素材と自然を生かして」をテーマに、婦人会は、バザー・手づくりの手芸品と加工品・生花・書道・農産物等の展示と即売、お役立て・県婦幹旋品の販売と盛り沢山のメニューを精一杯頑張った。

それぞれの作品には、会員の方の並々ならぬ苦心の跡が何われ、作品展示の方法にも斬新さと工夫が見られた。文化祭は、大代町の一大行事でありそれに伴う苦勞は大変なものであるが老いも若きも一つの目的に向かって集中するあの心意気は大代ならではの。婦人会離れが心配される昨今、若い方の活動力に感動し、感謝した。

又、文化祭前々日の夜の会場作りには、自治会長、運営委員の方々（建築技師あり電気技師あり）の献身的、

好意的な協力に涙が出る程嬉しかった。私自身を振り返ってみると、あたふたと右往左往するのみで足が地に着かず、皆さんに助けられて何とか無事終える事が出来たことを本当に有り難く思っている。

これから皆さんと問題点を話し合い来年につないで行きたいと考える。

「文化祭を振り返って」
文化部長 森 守

昭和四十九年に大阪より帰郷して、趣味の絵を描いている内、当時の田辺館長の下で始めて美術の方を担当させられました。渡館長になり両氏の下であぐらをかいていたので楽でしたが、今年はどうした事か文化部長にさせられました。

これと言った知識も無く大変でしたが、市原館長や部員の皆さんで話しあって、来年から毛利元就がテレビで放映されるのでテーマも「武士に関するもの」と決まりました。それに併せて大森トンネルの完成のパネルと、石清水八幡宮の大鳥居の出来るまでの写真

などを展示致しました。やはり早目にテーマを決めて取りかからないと、中身の濃い物が出来ないと感じました。内容のある物にする為には文化部はそうとう勉強しないと出来ないものだと思います。

来年は公民館長をキャップでその下で頑張りたいと思います。皆さんの感想はどうでしたか？

「みんな頑張った文化祭」
本郷 森脇タケ

文化祭当日は秋日和で大変嬉しかったです。寿会では今年も手工芸品を展示し、女性部としては文化祭を盛り上げるために、コーヒー、おでんを企画しました。「おでんをやっても儲けにならんで」と言われたけれど、町のにぎわいになると思っておりますことにしました。

役員さんには二日間一生懸命協力して頂き、美味しい「おでん」が出来上りました。

寿会では赤いはっぴを男女十名に着てもらいました。そして男性部の方に

は、客寄せに「さくらになつて」と頼んで「さあいらっしやい、いらっしやい」と活気のある呼び声でお客さんをお呼んで頂きました。本当に忙しいけれど楽しい一日でした。

婦人会ではかしわ飯やうどんといったバザーもあり、各支部の作品も沢山出ていて大変な心配と御苦労であつたと思います。又芸能部の各自治会対抗の演芸大会や、八反田自治会の豚汁などとても美味しかったです、町がにぎわつてよかつたと思います。

役員の皆様大変お世話になり、御苦労様でございました。無事に文化祭が終わりホツとしたところです。

「華やかな色別対抗芸能大会」

柿田 谷口俊美

「はばたけふる里」をメインテーマにした文化祭の多彩な行事のトリとなる色別対抗芸能大会は、午後一時より満員の会場で華やかに行われた。

町民体育大会で優勝した水色チームの総出場による「劇」桃太郎・お猿のかごや・花咲かじい・高山節等が工

夫をこらした装い豊かに歌と踊りで演じ出されると、会場は爆笑と拍手で大いに盛り上がった。

次いで黄色チーム。しみじみと聞かせる「舟唄」と高校生の歌、有志による「どじょうすくい」赤い腰巻きにすね毛のたくましく踊り子あり、司会者に氏名性別を問われ会場を沸かせた。

三番手は紫チーム。往年の美女、男装の麗人による「アンコ椿は恋の花」舞台狭しと練習の成果を披露された。

これよりカラオケとなり、赤色チーム白色チームの有志によりソロ、デュエットと、日頃自慢の喉を会場一杯に歌い上げ満場を酔わした。飛入りは饅頭屋さんと下谷の丹後さんの「浪花恋しぐれ」で予定の二時間を終了した。

今年の芸能大賞は水色チームが獲得し、大賞トロフィーが送られた。

司会を永年つとめる日向さん、裏方の芸能部員さん、大会を盛り上げたサポーターの方大変御苦労様でした。来年も頑張りますよ。



「第十二回東京石見高山会

の総会開催に出席して」

公民館長 市原仁郎

去る十一月十七日(日)東京南青山のホテルフロラシオン青山で、表記の会が開催された。

当日は大代では文化祭が、関西高山会では「うまいもの食べ歩きの会」がそれぞれ開かれたので、参加者は大代から私と木村幸司氏、関西からは田中公道御夫妻の四名で、合計三十数名の今迄が一番小人数の会合だった。

会は下市出身の佐藤定雄役員の司会で進み、田中憲経会長の挨拶の中で、「会員の窪田忠雄氏と元大代公民館長で本会の設立に尽力された橋本昭二氏がこの一年に亡くなられたので黙祷を捧げたい」と提案された。私は大代町文化祭と新設される大代バイパスについて説明をした。

毎年のマンネリを打破する為、今年は大トラクションとして佐藤定雄氏の御世話で「懐かしの大道芸カルチャークラス源さん」の南京玉簾と手品が懇親パーティーの中で披露された。下市

の佐藤哲朗氏の姉龍沢住子さんも源さんに指導されて、玉簾の実演をされた。田中公道氏はイタリアのカンツォーネを四曲歌われ会場を魅了した。会場では原田万里さん撮影の「大江高山草刈登山」のビデオも放映された。最後に「幼なじみ・母さんの歌・旅愁」を全員で歌い、楠義見氏の閉会の辞で終了した。来年はもっと沢山集まれる様工夫したいとの事だった。

「旬を求めて」

関西高山会会長 田辺正義
料理研究家

その三「エダマメ」

「ビールと言えばエダマメ」と反射的に出るほど、エダマメはビールと相性のよい食べ物です。ビアガーデンなどで、同行した若い女性たちに「エダマメの育ったのが大豆である」とウンチクを傾けると、「ウッソー」などという声が返ってきます。エダマメが未熟な大豆の一形態であることは案外知られていないのではないのでしょうか。大豆は他の豆類に比べ、タンパク質

脂肪が格段に豊富です。タンパク質の含有量が全体の三五%、脂肪のそれは一九%、そして残りが糖分でほとんどが水分がありません。この栄養豊富な大豆を、熟する直前に採って食べるのがエダマメですから、おいしいはずなのです。枝についたまま食べるので枝豆といいますが、別名「アゼマメ」ともよばれました。本来は田んぼの畦のわきに大豆を植えました。

大豆の主根は地下1mにも達することもあり、たくさんの分枝を出し、この根に球状の根粒ができます。根粒には根粒菌というものが発生し、この菌が空気中の窒素を貯えて大豆の栄養源となります。大豆は世界的食品ですがエダマメ状態で食べるのは日本人だけなのです。

大豆のルーツはシベリアのアムール川流域とされています。そもそもエダマメを生産し、これを嗜好品としていたのは東北、関東、新潟など関東以北でしたが、現在では全国的に生産されています。それだけエダマメが日本中あまねく定着した、国民的好物となったからでしょう。

なかでも静岡県ではエダマメの温室栽培が大変盛んで、年間三、四回栽培しています。ちなみにこの実のなる温度も十五度です。

東京・築地で定評のあるエダマメは埼玉県「ユキムスメ」群馬県「天狗」徳島県「宝石」、あまり市場には出回りませんが、山形県庄内「だだちや豆」「新潟県「新潟茶豆」兵庫県丹波「黒大豆」などは、昔ながらの香りとコクのあるエダマメが味わえます。

はちきれんばかりに張ったエダマメは、若い女性のジーンズ姿にも似た、若々しく瑞々しい弾力があります。塩ゆでしたのを指ではさむとスポンと口の中に飛んできます。そしてほろ苦いビール。若さと人生の渋味を感じさせるこのカッパルは、やはり日本の夏にはなくてはならない食の一つです。

最近、出まわりだした「だだちや」味、香りが、従来のエダマメと違い、私は本当においしくいただいています。

「美味しいものを食べて

味覚を広げる」食べ歩き会

関西高山会事務局長 中本 弘

なにわ大阪といえ、食い道楽、関西高山会の名物行事、食べ歩き会をミナミのオーバスワンという店で、十一月十七日、午後一時から約二時間実施した。

四回目の今回、その出し物は、広東料理で新鮮な魚貝類が中心のグルメの味は中華料理とは一味違つて、あっさりした口あたり、柔らかいアワビとホクテ貝など家庭ではとてもこんなにかかなく出来ない。プロの味をゆっくりに味わいながら、静かな店内の雰囲気の中での食事であった。

集まった願おれも中年以上であり、ゆっくり食事をするのも年に一、二度あつてもいいなと感じた。

私自身今まではうまかろうが、まさかろうがとにかく腹一杯食べる習慣づけからうまいものを少しずつゆっくり味わいながら、くつろいだ中で食べる食習慣への転換を考える年齢である。これを契機に体の為にもという意識を強くした。

会では田辺会長のワサビの説明やふる里川上でのクマの出没、そのクマを射殺した後、そのクマは「どがあしん

さったか」「クマの肉は食べんさったらしい」「その味はどがあだつたか」とふる里なまりで歓談、楽しい予定時間を過ごした。

最後になりましたが事務局の不手際で東京石見高山会総会の日と重なったことをお詫びいたします。

「六十八才の誕生日」

大田市 原田萬里



十一月十七日は私の六十八才の誕生日である。

それを記念する意味と、体力の限界を試そうとして大江高山に登山することを思い立った。

今日の天気は曇、夕方からは雨になるとの予報である。弁当を作る妻に日頃は何も言わない私だが、今日は柚子味噌を添えて欲しいと要求をしたのも不思議な感じがした。

山に登る者は不測の事態に対して引き返す勇気が必要であることを自身に言い聞かせながら出発した。

雲間から漏れる光に一喜一憂しながら歩を進める。散り残る紅葉をカメラ

に収めながら……。

急峻な登り坂を登ると百米を走った時のように胸がチクチクと痛くなり、足を止めると頭がボーとしてくる。そろそろ限界かなと思いつながらも気を取り戻しながら歩く。

歩くこと一時間、山田側のピークにたどり着く。大家の町並みが鳥瞰できる。その昔大家荘としての荘園を形成し、市場町として近郷近在の人々が集まった所でもある。初冬の陽光に屋根の瓦が鈍く光る。荘園の時代には家並みは瓦ではなかったのではないかと想像をたくましくしても見る。

今その町で秋の文化祭が開かれていのだ。

転じて海の方へ目をやると、深く入り込んだ温泉津の湾が望める。昭和十年五月七日巡洋艦「鬼怒」が停泊して一般に公開されたと温泉津町誌に記されている。私はまだ八才の頃の出来事ではあるが思い出が鮮明なのが不思議である。

分水嶺を吹く風雨にさらされながらも生き抜いている、紅葉樹林の枝張りの妙に感心しながら頂上へ向かう。

一月前、下草を刈られた頂上は、広々としてまた静寂そのものである。私の生まれた家のたたずまいが眼下に望める。亡くなった母が「お前は、ご大典のときに生まれた子だけえのう」と言っていたことが頭をよぎる。

昭和三年十一月十日から十七日まで昭和天皇のご大札の行事が行われ、この故郷でも盛大なお祝いの行事が行われたことであろうと、その昔に思いを馳せたのである。

頂上に滞在すること一時間

柚子味噌を炊いて

待つ妻あればこそ

と 登山記録に書きとめて下山することにした。

麓から振り返り見る大江高山は雄大であり、思わず両手を高々と上げ声にならない万歳をした。山を征服したという感慨ではなく、無の境地の充実感の方が適切な表現であろう。

千円札をポケットにねじ込んで、公民館の文化祭に顔を出してみた。いろいろな催しを見ながら、敗戦間もないころの青年団の慰安会や大家の「淡紅

会」の風景を思い出した。うどんの味を確かめ七百五十円の釣りをポケットに入れて、薄墨色の空模様を案じながら故郷をあとにした。

「幸せいっぱい」

椿 高崎美枝子

待ちに待った ひと雨 植物たちはやっと思を

吹きかえしたよう

朝早く起き

さやえんどうの瑞々しいのを

かごに取る

ほととぎすが ひと声

何と すばらしい朝だろう

幸せいっぱい

「書き初め大会への作品募集」

お正月に公民館で書き初め大会を開催致します。題材と様式は自由でどんなでも応募できます。振るってご応募下さい。

提出〆切日 一月十六日(木)

展示日 一月十七日〜三十一日

十二月の行事予定

◆3日(火) 編集委員会

◆5日(木) 正月料理教室

◆8日(日) 福祉弁当

◆22日(日) 連合自治会

平成九年行事予定

◆1日(水) 元旦マラソン

朝六時から集合場所は石清水八幡宮前 皆さん走ってみませんか。

◆1日(水) 新年挨拶交換会

午前十時から 公民館にて

会費 二百円(当日)

皆さんの参加をお待ちしております。

★——★おしらせ★——★

◎社協大代支部から

先日、文化祭に於てご協力頂きました共同募金街頭募金は全部で一万二千円でした。厚く御礼申し上げます。

本郷 山根茂文様

川上 渡井富重様

香典返しに替えて金一封の御厚志を頂きました。厚く御礼申し上げます。

